誹

乃拙文集

近江 豢濃 信濃 上野
武藏 相模 伊豆 駿河
甲斐 下総 常陸 陸奥

卷六

へ 5
2873
6

ヘ5
2873
巻 6

[illegible]

目なり御文集巻之六

貞享三柔兆攝提格。後病十四日帝都をば霞ゆとことに
たちまかれ。しらに橋乃春風に。花のしらむ事を恥て。笠の橋を
かくぶ事て。東山道よりしもむく。此あ乃こハ古祀数多あまぎ。
大宮略を

○かくてこれく大垣洮人乃
ぶりまうでしよいせ桜よと
きくて。せうぜこしてをき
侍まを。ぬの春祝日にまた
ゆるそつくをくられし

○信巡れ礼乃行ぬりまし。谷
汲よ詩でし高地寂ことし
そいとすさうなり。

○伊津賀川乃鉛くむなどゑて。岐布の里稲葉山後たはは。
そやなりあ。鵜沼乃里に泊る。

○夕雲雀家の山路や片篭
○花桜雪をれとくや板庇
粧ふる桜我留まに風流に
二里追うつ笠乃蹉く　美濃大垣　木因
こほは風乃いぼこより桜　仝
解て納るむう爾伽に谷汲り

○賤家雨夜　岩田乃小野を見る物沼乃里に着くれば。あ
やし乃ふせ屋に舎る。左右海ならに。薤墻樸籬を築とし。風
もたまらぬ簀子乃うへ孫ゆてるに藁の延一重ぬ志くり。貪
業の家業。飯の生業にいづせき調度とりはらなひ。やうく
魚油乃ひかりかきり也。主の匠まで聯にくいつひなし。老嫗
の頭に干芸乃ごとく。手に和布道乃やうなるが。紡績いとなふ
で物語とるに思ひ出さる。此畏の山里にむかし十市の宗女
といひし戯女。江侍郎を恨こて。寒園に獨卧と意賤を作しも。
衣に舊涙をとゝまほと。うしこつるる此袿扰物とれど。花の
詠とふ面さへいこじうふりて。床もうくばかり漏て。愛らん事
もかなく。かゝるうじて東雲に焉に家とりじ。おどろき。晨粧を餞。
抄鏡に花をぶりし。ゆふも面ちされどといそしぎに。搨粉末の

和を仕丁もあらぬ。いとぐなづめくらし。黄醅乃瓢にむさくく。楽
天が酒功賛を吟じてを。復さらにみるぞいでやと。茅竿ぞひの
会珠捻り。蹤座して真印を結ひ観ぜれば。菊菴金場に変じ。
稼去則浄刹。そのぶかの面も其落乃法面。郭会乃横雲引かれ。
易ぬるか草鞋乃煙まるを　○面に手を草鞋に花の火生れ。
○かくて大田の後大井里西行塚にて　○莫獨立とありつれ。あり塚。
尾別へ乃追分。中津川にかり寝して。券と信乃境橋。為籠村を
る。ゆふに花に木曽の幽谷にうつる。朝をもむにかれて立しかど。
陰山鉄道を通さ孫ぞ。木曽路を今ぞ盛なる。向上ぞ鼻塩に
花咲。直下を膝頭に良材をしがらむ。樹神川音のらそひ。下
丁さら鉞乃聲。小にひゞきぞ。子をよぶこゑ峯にかへり。桴に遠
鶯を。面我さしてなづれり　○木曽山乃斧やをのれを呼ばる。

○鶏鷄も食ふ物ある餘寒の朝　鶏卵を煮るとそれぞ狼狽を
窓。巖ト嶮。をとるもそれぞ。猫股尾よ壼く。ともぞ捨ぜ又。梢が巻の
夕煙。揃走が軒の統のきぬ。冷ーきふを風ぞ。ぬぐ。ーきうを
馳墜ー旬の月川。牲水をみくこ。満山の花ま。香をもちくほか
をて書ぬ。野屍須原ぬる。

○寝覚床　こゝもと夏真。寅うそみく風のあとそみぢの桜川
ちりうくそそ祢をめの家ぬ多露石綵やむつさ。ものそそ。
祈雑略の大当。丹後浦。当ちの序左。衣色はの下津男就ぎみ娘
にち法ぬよ秋。お亀といひ一国ぬ咳。号金物ぬ越させ。統
よ入婿よ祈り。ぬ日の抱をとう一。ー膿七百年ぬ寝ふて。再世
をそそうの春とそり。事ぬ眉堂の疑を拾り。仍孫のうくう
やうくぬ離くむーそ。当の業そく。筐の第そうま堂ぬ条を

そうむー。茅白の気ぬ餉とー。鉋をそのみー。ひそそ陽居ふそう。神
地仏男の井。堂。白雨天地を幻綾ようつー。さーもふるのつう
ちこの中。蓋堂の滑肌ぇ昇。吾の級をそそ。合浦の珠を
削ふのこそー。左官の岫ぇ。年枝深ーて孤猿社亭の景色
飯をうくし。驕歌ぇ永堂の扉栃て。寒裏そ蓑洞ぇ丹雷
めそそく。杉ぇ煙。ふの痛ぇ寿ぐかくふふくぞ。郷ぇの鬼白もこの
らうれ小町が骨吟をあそ。
ふくー。屋体ぇの多ぇよむう色ぇ。山導林寝ぇ。陳ふる物眉
諮偕。麻衣のお涙とり一指。直指太根のかうんけ。
こえ鶏代そそく。脅ぇ。後ふるのよ大呈擢うのく。ぇるこの風
月ぇ碗中の視石ぇの蕎刀ぇ。ふの口ぬ。一千七百番
ぉそくこ。ぃ跡ぇてそそぐとて。○煙無掉や。ぬ花彩ぇ寝覚の床。

夢の世もかなぞおしき猿枕あくる寝覚の床の氣色は
即時に一軸のきちを生し。揚松林弥生坂。福鴻。宮城。名目右所
本山。松峯仇坂。立禹坂。青柳猿所。丹波鴻。川中鴻に出むり
信云。兼信鼻をしたまふ戦場とかゝり。善光寺目覺屋なにゞ
が亭に法く。先珠数とりて。ちかわをうさ仏目の善光あるは
寺の境内繁をたまふ。信に月支毘舎離城の長者。紫金をもて
一擽手半の西王傳縁を世に知所。お紙に一巻せし。再ニ略を
信るに初巻の反。戦後の国に出る後の時に立ちたんと約束し
信にはいそ自計啄し。同余三日。戸隠にて富坊善光に御望。長編略
○戸隠山雨窟　三諦三宮の中にも奥院天蓋をもひ思益
神児。勇猛手力雄尊。此一言の戸をひさ救ち。信州首答に挽
御自神も寂寞金剛の窟内に曳籠り。金神不得内身にして。

九頭龍檀現とよそれまして。神奇を龍花の暁に移し。流生の
八苦にかゝり。三贄に労じおりしさ次にそおそれしかも。往古
より乃奇瑞海ちくなる中にも。目をに十合一飯乃美醤酒は
一粒も殺し給はぬ。かつ氏人乃傳ふる初穂乃珍菓を齬然咀嚼
まれ音を瀑布にひぐさ。和光交叉の鰹を松風にこゝふとりや。
掌に神図第一乃生神。語るに牙毛もいよぶちぬ。中古自家
金風乃氣仙。学門行者神仏胎金乃法山といまちめまふ。幣
殿梵閣。岫に法ぐさ。麓にならぬ。されば三十三窟乃奥舎。一
十二峯の佛跡。社僧六十宮。境内十里経あ事。あく語ざしの
詔刀言してあつざみまを。◎ゑ八雲八山の法ゑ。玉樹言ひ。
雪岩眠り。擲猿を御贄魚我釣。鳥鳩に援縮を挙ぐ。こや仙泉
乃常世にやあらんさ。ねがら雲相妄心乃空胎に居り。生れぬ

さ紀乃文母れ伴風ゆよ綴さて　○ちゐるや此曉の郭公
うぐひすもさとし出ちる乃作録を始終ちらぬ天乃御柱。
○弥月冒首鞍山園原山をこし、文晋出たる乃如来よりて通りし
て苅萱ちるを称し、義仲の古城由年が領地、伴房の里更科山
乃際が通りがてら　○姨捨し山乃行人つの子紀。
○かくて上田海野小諸塩野の唐屋小林氏ありけり。明まい卯
月八日舎日ちりてぞみちづれあまたゆり、さしもたかき紀浅間れ
岩る天狗山。去る坂すどうらりて、禅頂煙洞乃内猛まぬく、四
里斗。旅毎のかたはし煙乃ちまき、肝をひやしくて逃ま給ふ。
漸く麓よ下向して、犬伺山真楽するよ浅間記を一軸残ス。略
浅間る山あさくるるべき煙かは石ガ牙も続乃雪ふくらむでで
○碓氷峠　茶店よ憩ひ、偖へさくむし菓子相石、宗祇乃息師。

台山法性坊、此余風ふ一念三千羽乃経翅とひ偈乃方忽むらひ
乃余業ふ飛らけり。东代利生れるあるよ、仙寿不滅の白雲山。
不塔る妙儀大権現といつられかそやなどるもさ、されて世
明戯論の排雲牛と豪教ちかさよ当余乃法月鞘よ鞍りて、あ
れ奥乃院の銀巌岩山乃頂上ふ打裏り、阿字印心の親向て、る
くさ法界余然と一白ふちぐめん敷と、妻。三れそら搭おふをれ
搭をとるよよるきかの名高飛界を首途乃一るでみ古風乃精の
ぬきぬけれま文挑むのたられぞよ○密豆ヶ雉氷れ茶屋の餘。
○是行く坂とおり本社よのぼり、中まるい妙儀法界、堂乃うち
よ四搭乃大杉るそり。是すまうち妙儀配向の社合まりとぞ。
森しと古くろろ廻廊乃うちふ、浅粧濃抹の寄巫、白拍子
吻く祢泥しが末然とさんよ掌を九ろがをとし。信よ哀歎の神

鈴よハ砧のおとも丁東と音つゞひ。蟋蟀乃鈴笛よハ襟乃涎も達留
やとあられし。　○妙儀おは鼻ぐたうひて子叙
洛中の洛外る奥院　○謹ハりや市子が夫ほとゝぎす
巡礼し京眺かましかしかれども連の様にしばしとはさんで略。
○かくて松杉桜楷る蔭を已ぬ。経営に一宮して生法師乃ちよに
よりの。鴻巣大宮をうちこえて。余十二日。江戸本町富山氏に至ぬ。
○江戸泰平　めでたしく。富城言あるつむれども。安年あまねに
おもかゝり賑ひさめく豊に気色き祥代もこゝろに目さ揃。こゝ
白水乃くれとハ。言ずふむさし野の広きさ御恵み筑波山。三貢を
はこぶ馬耳峯乃中荷に清せる衆目のひかり。おすゝく黎
民乃竈のさかりよ長くべきそろ。富士乃岳よハ延月治世乃続
を掛。放生意恵乃海の魚おどろかぬ群舟ハ唐土すのごとや

はらく続き。ふと遥百里乃山はかく。埜藤乃原れ旗田菜あつく。八や
ちくさ乃種まきにあるびと何ふされども。泰平今世え。忠孝仁徳乃
誹謗ぎふに何うたまれど。聖乃祈人の隣風ハ。茶目ひわりて東
叡山も文字実乃菖蒲吹き。仁の等類乃凰なハ十日まわりおれ
おらひ。ちきは花の見あひまり江戸揃陰の錦蔵も爪判刀
をうちおりて。秋乃鎌よかけつゝ。ゆだりし。酔よ早速せり。堀
町ゑひ乃喧嘩咒罵も。棒鉄停来よ切やし。転も浴もちくろ務。
極生の昼とあわりふる季。隅田河邊の都名。以ねあるさ豊原若
ちるとかいせる土手がゝひられぬ手ばれの穂よ出る。よりゝる雀の嘴
もおどろかぬせぞめでたかれ。　○武蔵野を月の山端や付る
○深き道善孫りよりあひて　むさしめく富土が恋なり郭に
田舎の記をかく　やちし野ハ下女の紅まで葉田菜に

○閑居　世を避(さけ)て閑居(かんきょ)に和(わな)ぐ事(こと)は、ほゝ其(その)意(こゝろ)を得(え)たれど、一(ひと)つの固(かたく)なに偏(へん)して、人(ひと)にいばれ、他人(たにん)にほこるの心(こゝろ)あり。又(また)、交際(こうさい)を絶(たち)て、山林(さんりん)に隠(かく)れ、世(よ)を逃(のが)れたるは、一(ひと)つの清潔(せいけつ)を好(この)みて、塵埃(じんあい)を厭(いと)ふの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)に交(まじ)はり、世(よ)に従(したが)ひ、時(とき)に応(おう)じ、物(もの)に接(せつ)するは、一(ひと)つの濁(にごり)を和(わ)し、塵(ちり)を同(おなじ)うするの意(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、事(こと)を謀(はか)り、物(もの)の為(ため)に、利(り)を興(おこ)すは、一(ひと)つの自(みづか)ら利(り)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、害(がい)を除(のぞ)き、物(もの)の為(ため)に、災(わざはひ)を救(すく)ふは、一(ひと)つの名(な)を好(この)むの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、師(し)となり、友(とも)となるは、一(ひと)つの人(ひと)に勝(まさ)らんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、財(たから)を散(さん)じ、人(ひと)の為(ため)に、力(ちから)を尽(つく)すは、一(ひと)つの後(のち)の報(むくひ)を求(もと)むるの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、憂(うれ)へ、人(ひと)の為(ため)に、悲(かなし)むは、一(ひと)つの人(ひと)に愛(あい)せられんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、喜(よろこ)び、人(ひと)の為(ため)に、楽(たのし)むは、一(ひと)つの人(ひと)に媚(こび)んと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、行(おこな)ひ、人(ひと)の為(ため)に、施(ほどこ)すは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を快(こゝろよ)くせんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、譲(ゆづ)り、人(ひと)の為(ため)に、退(しりぞ)くは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を安(やす)くせんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、倹(けん)にし、人(ひと)の為(ため)に、譲(ゆづ)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を楽(たのし)ましめんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、忍(しの)び、人(ひと)の為(ため)に、容(ゆる)すは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を全(まった)くせんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、謀(はか)り、人(ひと)の為(ため)に、計(はか)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を用(もち)ひんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、学(まな)び、人(ひと)の為(ため)に、教(をしへ)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を知(しら)しめんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、文(ぶん)を作(つく)り、人(ひと)の為(ため)に、詩(し)を賦(ふ)するは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を述(のべ)んと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、書(しょ)を写(うつ)し、人(ひと)の為(ため)に、画(ゑ)を描(かく)は、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を楽(たのし)ましめんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、碁(ご)を打(うち)、人(ひと)の為(ため)に、将棋(しょうぎ)を指(さす)は、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を慰(なぐさ)めんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、謡(うたひ)、人(ひと)の為(ため)に、舞(まひ)、人(ひと)の為(ため)に、囃(はやし)、人(ひと)の為(ため)に、酒(さけ)を勧(すゝ)むるは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を娯(たのし)ましめんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、茶(ちゃ)を煎(せん)じ、人(ひと)の為(ため)に、香(こう)を焚(たき)、人(ひと)の為(ため)に、花(はな)を生(いけ)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を清(きよ)くせんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、庭(にわ)を掃(はき)、人(ひと)の為(ため)に、門(もん)を開(ひら)くは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を掃(はら)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、衣(ころも)を裁(たち)、人(ひと)の為(ため)に、食(しょく)を設(まうけ)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、薬(くすり)を煎(せん)じ、人(ひと)の為(ため)に、灸(きう)を点(てん)ずるは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、車(くるま)を駆(かり)、人(ひと)の為(ため)に、馬(うま)を牽(ひき)は、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、船(ふね)を漕(こぎ)、人(ひと)の為(ため)に、櫓(ろ)を押(おし)は、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、駕(かご)を舁(かき)、人(ひと)の為(ため)に、轎(きょう)を担(にな)ふは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、道(みち)を開(ひら)き、人(ひと)の為(ため)に、橋(はし)を架(かけ)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、井(ゐど)を掘(ほり)、人(ひと)の為(ため)に、墓(はか)を築(きづ)くは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、碑(ひ)を建(たて)、人(ひと)の為(ため)に、塔(とう)を立(たつ)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、寺(てら)を建(たて)、人(ひと)の為(ため)に、堂(だう)を造(つく)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、仏(ほとけ)を作(つく)り、人(ひと)の為(ため)に、経(きょう)を写(うつ)すは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、法(ほう)を説(とき)、人(ひと)の為(ため)に、道(みち)を伝(つた)ふるは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、善(ぜん)を勧(すゝ)め、人(ひと)の為(ため)に、悪(あく)を懲(こら)すは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、死(し)を弔(とむら)ひ、人(ひと)の為(ため)に、喪(も)に服(ふく)するは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、祭(まつり)を行(おこな)ひ、人(ひと)の為(ため)に、墓(はか)を守(まも)るは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、家(いへ)を治(をさ)め、人(ひと)の為(ため)に、国(くに)を治(をさ)むるは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、天下(てんか)を平(たひら)げ、人(ひと)の為(ため)に、万民(ばんみん)を救(すく)ふは、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、天地(てんち)を祭(まつり)、人(ひと)の為(ため)に、神明(しんめい)を敬(うやまひ)は、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。又(また)、人(ひと)の為(ため)に、天地(てんち)を祭(まつり)、人(ひと)の為(ため)に、神明(しんめい)を敬(うやまひ)は、一(ひと)つの我(わが)心(こゝろ)を養(やしな)はんと欲(ほっ)するの心(こゝろ)あり。

物こゝろ淑(よ)きまゝ。石筆硯(せきひつけん)の硯(すゞり)も泉井(せんせい)のつゝびて一時(いちじ)を忘(わす)れ。小斗(こばかり)を撰(えら)び秤(はかり)も狂(くる)ひ一吹(ひとふき)の初風(はつかぜ)の折(をり)ふし。君風(きみかぜ)ぞ吹(ふ)きまでの保食(うけもち)の神(かみ)も獲(え)よかしと。しばし書(かき)よりの指(さし)置(おき)。

○むさし野(の)や　まだほゝけぬ　ふくら雀(すゞめ)　四宮民素扇軒

○山(やま)桜(ざくら)　乃(の)ふるともいづれ狼(おほかみ)　道普

○茶(ちゃ)をこゝろみて胡瓜(きうり)と答(こた)へ給(たま)ふ　同子息

○山寺(やまでら)にしてむしろ一(ひと)つ。　素林

○夏(なつ)草(くさ)や　兵(つはもの)どもが　夢(ゆめ)の跡(あと)　大和谷

○夏(なつ)三寅(みとら)仲呂(ちゅうりょ)二十七旨。　隨車

武江(ぶこう)谷(たに)文別(ぶんべつ)倉沢(くらさわ)能見堂(のうけんどう)の八景(はっけい)のごく。即(すなは)ち真(しん)の一神(いっしん)也。

○筆(ふで)捨(すて)松(まつ)艶景(えんけい)　もゝさゝら人(ひと)の挿(さし)櫛(くし)と拾(ひろ)ひ子(こ)が薑(はじかみ)にて

かゝそめ給(たま)ふ。もゝさゝら岡山雅員堂(がいんどう)。英(ひで)一(かず)の器(うつわ)也。

枝葉(えだは)又(また)もとなぞでもあらう。えゝ乾坤(けんこん)乃(の)約人形(やくにんぎょう)。天地(てんち)之(の)気運(きうん)

乃風繰地匠陰質乃糸水をとゝて。縷にせし雛形なれば天織
女や箴とうちまん。そうて姫乃かけ針にやおしゑんそのて相
といふんに。先是世園の冠杠といふてき。雙眼には鳶尾乃毒海
を彫いき。浮泉綾乃風光紋八京にさうぎゝに。畠山の毒袖。
玉樹乃襟。青江の裾。瀧門の板指。常小さゝり。歸帆乃毒紋。閣
村みちゝし。塩濱漆田乃深谷。渦漱乃巴。螺蝀乃指振小紋。海
燕乃釘貫。海ちゝこれ卍。忍まそふふて面のだんぶ筋。
いさゝとのはりめがこ。阿吽乃毒略。雌雄の霧れ丸。磯鷹乃颯
巣。水光鶏れなぐれ喙。壹千潟の子持筋。蜑乃袂の綾染。漁
蓑乃糸縊。月目紋浪小摺箔や。風によりて金の杜れを。岬の拈
枝にさゞり蓀。光根緑乃浮蕚。とりまゝ綾ゑこ乃蠶や北に醬
蝦海馬。こやいさうけしの紗羅砂染。蟋蟀に鷽。蟶小贏。紫貫。

拈や梅乃貝ばくし。一雲く穴乃かよひ路を。小麗にぞゆへづ
きゝる。雲や霞の隈どりに。水れそつりの墨なぐし。浪にたゝき
逆扇富士。これぞこゝ一ツ紋左のよりお襴を。銑波根おとす爲来
筋。漆谷作り乃銑地釼。柳樋乃さし添に。鍬鑄金乃履とちき。
陽に向く立相。天籟清耀として。光聚自然の袷襦。冨時に税
変くし。紫羅青綾乃眺望。光鼻乃欄干。鴻梅乃帶。いかなり
韓言雲賓乃魂も。雲にや鈴蹄らん。海賊小曲。山雲東籠に。
見せざ新年の布ゐなさよ。此陰落法師も。此風天君に目合
しく。鎌柁乃添外に。蓋中吟を呼き。寓言戯乃姪をかぞへら連
彼黒鎧が傀儡の詞に。須臾弄罷寂寞事。還人生一夢中に似ら
只一栄乃糸文幻乃ごとし。ざれうこゝ乃衛の語。かきゝつ抜
りう梅にくり。○雛形の筆拵書にほとゝきに

「筆すてし松を常盤のかをとめて志ぬ事ぬ程に
○此日もぐに相別鎌倉にいる。みちもがら古絵ども。谷に陰に
まとくるづき廻り。扇谷浚渡氏後政よにたく。あるじ素問者
にてこゝる巡見し。古今乃傳縁に越和乃ゑりと不月面より。
佐曲所乃記録を。お哲の總重れし書かぎく傳まば略を
亭主の炉路より奇曲の雲の事。沼望に半紙を。
○臥竜松記　曾作乃天仙を家柄乃含蓄なれを。抱こな一庫
乃ゑりはあらじ飛情といふとも性何つく緑にのぞり。氣あり
あらはれ。名をよぶに熟をもなく。理に松なく勅我ぬは
何程ぞやと。拍掌拍徳乃京師にそこなし。いかぶかもに汝神
誰雲。時に松風答て言。吾を志らじ天然飛情正通乃質を
稟て。常色を吾柄として。其を真東風に家紫をとる。夏

も青嵐に雙調乃琴をなりし秋冬に蘇にかゝり雪に戯る。
亢竜悔ゆる事をさとして。盤根ふかく雨屋に屈を。どのづから
遍下神誰松の名ぞよ
だれしといふをきてく。
○不月面に神竜乃松のよぶれ
虎に角何る筆の文　勝政
○皐朔かまくらぬ立。西井の峯の絶波。大宮君乃退啓をしし。
海上はふかにながめむりし平のそれ乃人。由井の海なるに雲を
来迎乃粉紅をさなび。金沼常雲のおとりげをこやり。又新田の
ぬし猛劍を投て。湖を退あし稲村濱。大仏長谷ゑ。星月夜。
極楽ゑ乃切通。戸瀬川獨城海福ゑ乃付柄をあしたく。塩合
六町をおぼすし。江島金亀山奥院窟のうちまぐ巡れし。
古徳東歴をもひ合。これより大山にまふでし宿河原伊敬氏
茅鞋とさ。各伴ひ雲山を。町家の余学。神滅無業の地なりし。

○大山景境　本ハ下雪乃石根。鼻とるばかり乃世徑を歩ミ。
御宝ハ作法乃ことく額突。いでや角山開基の初祖。南都四聖
導師乃その独。良弁擔者抖擻行履乃時。此山乃深ハ。殺光
呉香の大杉あり。瑞風紫黄乃雲ハ絶なく。こづかゝ法相金
拝乃理刀ハ絶えて。中央阿字軸の生黄。不動乃尊像を剝給ヲ
灵龍不思議乃沸ハ。縁をむすぶ神乃霞。履の霜を山野ハ蓋
をなしまゝり。欠造の院閣軒をかさゝ。林下乃杜鵑。檻ハ乃
清泉ハ絶えて奥院。石梓擔現乃嶺の月を。空橋なりこの影を
隆て。神人不二乃主瀧ハ落合。本方明王乃根風を。兜率閣
殿乃遠寄ハ出て。凡聖一音乃雷山ハ雪ハ消しう。下畧

○生黄乃樹神目小見し保とくぎ事
御佛と神ハ人とのあや杉の鎮ん。其不動一神

各接拶乃白ども。根ハ小序を添えくらるゝしが。畧して○川宮又乃とし。をハ春の明ぬ　宿主伊藤氏　治直
○五月宮。雛襟乃春耳　游泥よりおて。西行ハ已夜家　沖津　是泉
ハ傳ふ。山彦山の陣ハかゝる。　笛笠ハづし。旅日記や千五月雨　三樽　魁風
大嶺がよひ乃むりしをひ。　嘴や詩曲乃笛代郭公　平田　是耳風
祐成が塚ハ廻向して。曽我古ハ絶うちる。小田原ハかりふして。伊
豆切御と心ざし。海をたゞ。石橋山ハ右ハ。根府河の関こえ
志鶴乃海岸。杉朝ハ乃かくれすひし窓をる。戸井杉山古ハ井ノ
森。伊豆擔現をふし拝ミ。走湯ハ拝り。贄海乃湯本。まゝ山ハ塩
生屋ハ宿かり。接づかれをたゝし。お小をこさこふるゝ湯ハ神骨
海めやうに。四ヶ計ひこゝ終し。佐しも此湯口。昼夜ハ云ゝ。ひ見ハ
吐ハ。そハ猛煙奇妙乃涌ざし。又こゝまさめづら物也。浴解の間ニ
温泉記一軸して。町長をふゞしに送し。記畧。○はまりたり湯口ハ墨鱠

○温泉寺風境　独居乃はれぐに肱曲ぬまで。湯口乃噇に目もあはぬ。精舎やありと濱海に引ぬ。済水乃ながれ温泉寺をもん墓原みち乃辻に立る青楓榜に見こされ。損軒のうらぶさ。柴門乃西面に。花茄の紅乃まぶさに。芭蕉ひとりわかさやかに。貧舩におほひかゝるぞ交めきたる。あくかしこのくさぐさとこれば。率技持乃庫裏なれ吠とちがむ家也をなく。鏗不鳴乃眠花獨れ地炉抱て喘息乃ゑるれ軍ことまこゝ也。勝理のさ紀考えて。家付れうゝに空をとりて睨をぞ。碁れ青ほのう也。これに脊して髑相のかゝへに大小さし丞。吸かけ茄竹をうど投て。面無三と眉汤ゝる輔車ハいかさ両側ゝる風情なり。向ハ住持とみえて。後便をと肥。洗鼠乃環などりなく打ひ落ぎ。彼国国に。山ゆ乃夜れ夕雪なぞ。淫拂嬌に厨かしれハ。彼地車布袋。恍惚児ぜこも乃似指さぐりて恐堪を。絵本に写さ両ゆしくや。晩進も遊と龍居ゝられぞ。住僧これゝへといひのことを。山中碁のひまに一軸ス。

○圍碁記　白色空陽乃大橋を形よりうへ乃玉誠乃具黒色相陰乃玉橋ハ象より下にあらはれて明徳の器なり。所謂二ゝ一ゝ頭密。動靜端なく。変化窮まなれ乃組そおしきや。写に よりて見を慮に。棋一局乃上に盤法碁一の陰れなり。一ゝ手いぼれの先にうへ家。一三紙うゑ。三亦三紙よびて九曜を聖目とゝ名ぼく。細目を年目のたゝひ。三百六十の骨頭乃奴婢も思ふ色に退居。手に無ふ色れ玉素を囲じまゝれを。九第八子の毛孔乃眷属も分別に汗を傳ゆ人二儀乃中央。古墨四角乃金色盤を色黄なる解盤を練合し。それ音宮の雪子聲丁丁然たり。石に黒白乃凡聖を見ゆ。四教五時乃手ぶて八宗に經緯たり。中

ことし九年瘟疫乃苦人乃眼を二ツ…てよ乱
上着乃願ふ〳〵水飯乞けふる沙を喜ん乃唐ゑ薯椒を吸つもし。
ふ〳〵ぬ息〳〵たるぞ世一乃墓ぶかよいふめるぶけ舎利に
愛着乃墓狗ふ祖。古目乱のたくらを也むく〳〵。千七百
則乃墓狗をたぐる。ぶ目ごふ〳〵乃狗よ皓賢。ふ目むさ〳〵乃野
狐等をそ〳〵ふんとてそ。ふる楊底心の座費〳〵を穢よせんとふう
ぬ〳〵。嗚呼。せんぐまぐ疣よ沙羅林よさり。ばをふいまぐ鶏歌城の
墓狗よう出ふ。書漆乃中ぜ小戯をねぐ。ぜうこれやれ
よ凡滑〳〵。石段乃根をぐ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
にふりて。墓代とあ〳〵ぬ文三曰ク。模無初終二世墓心。たうひふおり
乃ふよ遊戯をぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
の貴合小駄を進ぐ。ぶ地浪軍乃追落〳〵すぐぐをうちぐふ

二十有沈淪乃仇ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
墓篤よ古段かへぬ文三曰ク。模無初終二世墓心。たうひふおり
生乃罪を貧ふりふだま〳〵。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
指ぐ地〳〵読を祈〳〵ひぐる。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
乃粘指段弊よかふぐ。ぶ地浪軍乃追落〳〵すぐぐをうちぐふ
狸〳〵を。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
ふりてい。法方ふ貞小見ふり。崩浪乃統ぐ。目ぐ〳〵ぶり
感てそ。ふる茶盃乃物のたてぐをくぶふむりふく助ふを求。
左ぐ〳〵ぐ〳〵てぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
を捺ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。
ど祈ふぐ。十卅卅捧の貞ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。ふ〳〵ぬ〳〵ぐ。

雖りし。涅槃ともに断といれ。来指人身乃掌に。隠演をしてい。
見生上手乃不をあらりし。流多羅の碁經は法目さに指ぬで
とし。八宗法務員の奥ぬ手も。一目不切。碁聖別伝。不立凡石。
只あらさわしきは本来の待ち我ぬ立。不行不来の征我悟。
鷲中乾坤乃菅石を来し。五漏乃消地をさらむよりは事理
持碁ふうちなし。捨指のだんじを解下しさく。妄念無生乃線
香我杖にはさ。飛空乃仏菴にかへる。碁勢不可得乃空石を
見つる。贏輸乃境を離れ。鷺鳥乃るふ居らぬ。言ひく也
覺こうわりしなれ　○本来ぬ手に生死も夏ぬ月　無月菴三千風
○かくて御黨間巻に　一氣以おの部ひきく　伊豆温泉寺　住僧
立伝ひて。縁に満せて多くわりく。宇佐見獲我民に法く。
小序して　○小黄和て柳心を蔵る。　服　志ふ葉ぬ下に。営焼付　宇佐見　親家

都終皆屋言ひ見れば。みくり乃すぐれをかけこれば。遠屏
風に新乃うはりて月をさざむもおし。ぬれば伊藤の庄。松原
村山田民重伸義乃亭ふいる。此老を園乃屋に世ぬ菴を結び。
仏ぬ乃こゝぬを獨をかぐ。やぐく一紙をかく。　○妄念無修乃伊豆
乃海には。自然悟入乃月ぬうか。不知不知の大将乃煙洞を。
真必実ぬ乃鼠ふはるゝ。かれを見これを見なぐらも。いはれざる
跡魚乃化ぬこなひ。おれし穴やあ事と聞ぐひり。あるはを孤
震の油上にはまり。又を鳩杖乃程殺をせる。此濱畔乃法に。俗
程ぬ閑ぬ老あり。處茅乃細籬。山丹の園生ふださる。線香ぬ煤
蝶を捨り。妄ぬの男だてして息り。寺も一曲ある産なれば。ゆにな
く矢立の鞘面をし。手ふ達磨眼　○さるもなく香も云。自己不行咲こ唱。
とちこひ。先をこさねくいぐと。　指を月に夜ハ明やもく　伊豆松原　重伸

主一捧をうきなげ。言下に很せし。當頭端的あたりいと奇しぬ。
○いでや此伊敷入道乃思の館。東林院寂心居士と碑あり。哀
なるに有漏榮耀の事陰そ。西崖乃雲とのあり。東林一堆の苔の
しるに名のこしを。○東林の陰り高捨なほ[illegible]
○彼赤岩を沈し松が枝乃測。目蓮上人謫に伝服なけさうけ松
のむしとりけつめ。伊 ○袈裟かまし松乃侍者や夜鐘
森乃記長編せし。略 ○巡國にくるまぬ月よ夜雀 村上氏 光俊
○八幡聖。赤沢山。相撲場。碑石すどのむしとしひ。無見浦。大
井稲乃雜所をる。川津白濱の社殘なし。下田村櫻田何ぐし
よはく。當所を廻船所乃津なれぞ。番所いかめしう。町家手
金字盤花乃地。松入江の眺望。伊豆七島乃性氣。かれこまく又
海賊山なれぞ。下田の記一抽して。當村乃棟長角谷氏經氏義に

をく。記略 ○又武山記を ○櫻田や夜と帆にあぐる富士尾
書て。淺藏院に奉納ス。略。 水鶏夜や浦乃初雪 下田宿 櫻田氏
○帆柱やほどに下田の櫻麻
暫く笠をしぐる五月夜 角谷 經氏
○田畑氏に。經をよかふ
き住ん者なりし。法花 ○翅經や四大乃篭の郭公
乃記をうさく。 葉柄がくりも一味の五月雨 下田田畑氏 時長
○五月サニ日下田城立。長津呂綺乃檀現。京都芸州乃地。神臣
小沢氏所望より一抽を。 ○浮藻咲てく松城綺の入江に
○此所居屋所望より ○素良子浦やひとくの浮藻鴨の舩
○漸く伊豆乃果大山にのぼれぞ。小面に富士乃如龜とこ色。ゆくく
浮鶴家にてくれしに。又こゝかさしかんほどなり。此松濱乃宿。
岡氏乃屏風に風光を書。略 ○松濱や夜鐘咲なる東宮富士。

○當所清水山淨泉寺後山に徒る不動閣九宗乃記をかく。略ス
又當寺小幽元坊と云客僧ある。增長する遍參僧ぬしが。案内せんとて
富士山上を同居せし。接待乃記をして。○氣味涼しき乃品圖の名柳。
○邂逅和歌一老翁　芒鞋竹杖走西東　春花秋月等閑裏
吟盡扶桑六六風　松嵜沙門幽玄

○不乃人くとの中に　○祇や富士乃涼風一番　同奈倉政定
大の幽玄坊膠漆乃友となり。おつまこ仁斜。布藤坂。田子村。居士が
坂。砥山。松坂。大洞。八木沢。大肥金山乃真富士見えて。船原許ゑ
里を越て。流石ある紙屋三頭氏に。名物紙の記をかく。小茶の古城
蛇が小嶋。江馬。江川。ぱりぱり　○鼻小のせて富士を鼻ぬる風小
名不打ながめ。原木實相寺　○異を脱れ名化乃富士の宝貨人　原木吉村氏光德
ま丈乃記をかく。當不ゆり　○千付ません。ゆるて明も去周室　同氏喜房

富士乃眺望なし。　富士や恨む風小なびかぬ夏切御　内野祐仙
○當所の富士にあれて。古自体ひし。人々紙波なぐら。此當月
八日三嶋長圓ちりけく。現住昇譽上人に稱讃せし。當時の昇
仏富士來迎佛乃記を不望。即時にかさし
○富士來迎佛　山を動ぎぬ象。不光不乘山を。本有乃心社
云量來佛なるべし。此ふりと東海豆湯の譯名。三嶋西覺山
長圓ちに独乃昇像いさぎなりまる。是を要言有変易の波
種乃出。當住不滅の化身仏。源住和尚三づから禪頂しまふ。
三觀一心の合掌乃うち小。忽然と現しまふ。即時に白雲神
変乃理力。紫燈昇氣乃寸墨をとらく。彩刻ゆしさせ。為容彈
指一結の正身。立撮諸座の基者。誰かこれをしらざらんされ
む面貌にこゞれてかく。慈悲乃慍を。田子乃海に濃へ。白毫温柔

光れ。ぬるかぬ根乃恵日に むかふ。おわれん誓乃紫帆とす稱さ。なふく
その函へ侍船ゆきふとて。○無信の者也。富士来迎乃船頭度。
○又歯王傍伴ひ七星少へり。仁杉村。大乗寺の縁誉典秀和尚。麟
角果稟乃眉に見えて。当る果佛乃記に長編も。門内に峙ツ富
士山乃紫雲に注還を　○風かわる富士や佛乃駕かさ。
○富士詣　貞享柔兆攝提格且上旬。仁杉大乗寺に於て。住
侶をとなゞめ。打つ程よりあれ星紋かそふ事天なりとて。鶴
鳴朝紙を見れば。先達乃強力に擦りたせ。同あるにほとに洲先の
里に法く。下ニ丈に一揖遥拝を。これより蒼聖本ニ入る。竜馬
場を通。そや歩り小かつも。中ニ丈法坂乃拝して砂篩乃茶屋
まて咽をぬらし。女富士を大はなし　○かわりなく裾取しや女富士。
○ほどなく皓に至る。とばかり頸を担回せば第相乃湖水足下に

なし。雲霧を姫まへ入れば。こや空隙乃雲衢をなけ。梵天の
霊驛に入るゆゑ思ひ。稼古心いぼちあふかん。中乃涼風に爪
さ紀あがり。蓬とと同りに乃ながらりす。掃のかどの兀山に碾
谷一なぶれをなく。おきさへ五星の中に一滴乃水なさそ
石霊なれ陰女懐れ乃氣凝るがゆ面に。陽男の雲ふるひ鑁。
交斧を取し。鑁面滝をなほ。これ完親乃瑱氣なり。されば山を
穿つ裾をあなり。水あれば谷何事。茅に増長時と無ぶるの
取し。たるを当山を乾さかれたるに事いかん。答えくゆへあり。さ
なれば小陰中乃陽火。金袖にはたらき。むかふる氣煙下に待まふ
事たるとしろ小。かの東征乃時。菓蘿乃餘烟。天の焼聖乃乾に
燃ほき。山懐百里四方を焼虚て。火気頂上に口を開し。古周
乃薪尽てやありけん。しそむかし乃煙。引来りもたらばなん。

果し。捜山となるゆゑに。あばらも泊るべき湿地なし。されども
風雲乃精氣にはらまれ。ふるまでは滑坂乃岩屋ハ銀銅とのべ。
猿とべりのなぐれを瑪瑙乃盤にひとし。小大の芳田よりハ薔薇
寶山なりゆゑ嘗ゆもことわり也。筆小ゆゑ五光乃紫煙五岳乃
宿雲も氣とされぬべし。たゞらく尻をへ遠見せしに。心慮り
氣擡とし。左乃手ゆ菅。右に餅もうちわきれ。唫ぬ景
味に後肥なりと打笑ひ。おくそく甲斐乃吉田口大行合に至。
五十軒なりの石室あり。おかく乃糸人白さうぞくに白杖
ほさ。うへに下に一むれく会仏の寄さるハ。口ゆ死ぬ乃山田の
廉發に似て。思ひくに帷子紫入猊かへるさきハ。かれ乃此夜
領掛乃姫がおとりにひとし。これぞ第一乃難所の絢突坂に
ほく。とかくしてのわり果。菜師が岩乃おより。九川八海跡乃

下に見ゆ。既に禅頂八景さりとしてさりぬ
筆にぬかぼく。此丸鏡も雲我むさびて三瀬桜とし。光ゆ山乃
開始を。いとも加しこさ聖老孝安天皇九十二。水雲月一夜のうち
に。江別に凹乃湖漏ゆ浮橋ゆ原に凸乃富峯忽然と生むる。
志ゆ何まぞ八層の下法に皇帝の陵をとゞめ給ふ。かつ役の角
仙神託とうあ。志くも天照太神乃息神繩。西拝鴻姫乃幸魂
加久姫命。則此沛山の本主也。啓白。天津むかひ大小と拍
合掌の中指を神の法室と定。中極の大居に向。第一方辨。天玄
乃浮橋に石脉乃明繩とうち沒す。第二辨。天息と脇中内編の
古に本繩と合しむ。第三辨。人息を吞で。今日五運の神身一
致乃宝鏡にうつし。黒衣一殿乃神合に住して。祝詞祈願をつゞや
き。神の聖心に志給しめせと。神云のなりまこ拍なし。三秘の神辨

ことなかり。夜眼乃岩口をひらき閻猫乃底を睨く。諶り金猫
廣野ゝ雲吹あらる神風よ。雲眼乃煙雲を吹ともに被除。心
もうさ多つ雲さへたれて。いづくや霹靂殿もうちはく早
魃に。陰陽落震乃氣はらき。大鼓乃撥も質よや。蚤なん。出蠻
衢電ゝ乃あらもきてこんぞ。地震場もひらきうの日和に。水火
の境杭。西成の根なくまりてや。陰液金鉄の木梃も金魁乃備
錢にさ毋ぬらん。輪に勅ん乃宵も給ぬ。東乃尾の引揚を越
て。斎の川原となん。廣猫縹緲とし。四維悠揚なり。いでや偲鬚
と圓生樹に蒐。大膽を綸乃鼻鼾とのぞ。湖陽を胸陂に吞。山
陰紋氣岸に篭てし。以首賢聖の瓢太子。自己神髮の瀧鉤に
斎鞍なきて御せられ。調子丸独紋信まるく。雲漢を逍遙し
給ひし河。麟毛鳳羽を拾ひ給ひしも。此になめりと現ぶごとし

狂ゝて圓位法師が風にまひく煙竿のなかりまに浩てとよこし。
目法事にはしけるなれば。風になびくもひとあるに燒つまん
なかり給ひし富士乃高根なり。　文書紋なきさぞけて茶紋瀬なを。
○富士富や一書紋ひ給けるく古田平　○是より南にむかへば駿
河口乃滄溟より。天狗乃羽風に動く。村雲乃叙が峯。隨手廣道
に階坂あるも。蓐乃乙を浮なかと雲毛卓て。百上懶なもおかな
まし。名もむくつまき其間の谷を。嵬嶽に二河乃橋とまうしたり。
さなかう鰻乃鱗をふむかと躄て。戰ぎ。吾男なかう生犍とはさめ
て圖數と鉅歩り。呼とのむ息に。曲猫と回り。吃とはく阿字の主
嶽大目嶽につさぬ。信に眼おの地獄拾柴。邦正不二門乃おには
平等一掃乃夕陽。和光乃新いさらぬ隈なし。雲にく神佛和合。
夜郷一連の景給ひなれば。よ水堂の花乃峯に。目藥迦の三如来

宝暦のころ利根乃雪ちさきあるおろく。毛香實梅乃中宮
よい。幸有乃まゝ称尊ひくろよさう。下化衆生乃勇
和ぐつる名をかり。しゝ三蔵をおりつよ。ゆりい三種の神祇三才乃
流用ゆゝせ内よい空俗弟一の三帰。三業三業の澄淨を秘とこれ
ゝ。八三よ一会乃文第法飯一乃母もり。阿弥陀浄乃護念法の
甲冑よい有相の引将を振り。九さよの利乃い斎飯乃なよ。
ちぐゝく観経乃胸中を結ぴの夢や裸富士。凡の卅余子の八宗九
○八宗祖ゝぐ。うゝ世乃夢
猫ぬぐり。又白地乃浜阿猫
猫被掛をみむ。猫猫をたゝん。称名撃嶺を猫家。あるい
鼈ゆゝ乃洞窟。ゆるゝ蹇もゝ乃私通。ちぐくとも阿猫よ猫猫よ
をおぼ。ゝ雀ども乃夢鐘とあらゝひ晴ゝもつぐ。かくて

元乃大り合乃ゆ富ゝり。ゆゝ乃夕映ゆんと。赤ふよゆゝ。葉を
第富一序乃ゆゝをゝさゝゝし。紀目面よかゝゝみまゆ。ぐよおゝ房
別鏡浦乃藻梅ゝく富士乃搖よ寝ゝと。○富士も卧ス深乃床
や後の浦。さんぐこそ俤の富士。ゆゝ乃ゆゝをゝ。
法行意乃三富士ありゝそみ富士。ゆゝ乃ゆゝをゝ。
目鏡乃浮うすきゝ天門氣形吳軟奔怪のすぐことゝもろうごゝき
はゝゝくゝき俺。おんく人当世界よいおゝ〳〵ぴ。生ゝぐ〳〵浮香華ノ農
乃界ふいゝり。死ぐゝふ大屋阿巌乃なりちよりぬておがふ法界心
地の膝乃上ゝ一芸乃居ふものく玄如堂ゝ乃猫よい一聲乃
惣歩をうゝくゝぐふゝ徨眼よ一醫とれぐ。ゝ乳乱ゝゝく。東高
と狐とんゝ。狐と狗賓と驚く。ぐ居乃氣のおよ。三保の松原
も七ゝを寶猪とゝり。阿よ乃浦ゝをも。八功徳池よひゝ〳〵。ぐ飛芸

に一心乃変化なれば。なぞ見相にはらざらむと。飲喜乃心眼
よりこれ我これぞ。岩松は孤雲乃笙簫を唱へ。峙虹は落日の来
迎我もとゝ。神女自寄をもてべりて。雲蓋を舞踏し。神堂は
青竜をありて雲玉閣にかざし。花の曲をなし。美仙水雪の肌は
玲瓏。清風を吸白露我醒し。桃源乃客には。人中乃擲子逐ぎ
あり進ぞ。紅上乃風風指らざるに飛浪る。寸光乃眶に萬物の
文をみる。清廬に。雲作乃一雲を神智をもてづりて。理神乃
格景を劃し。雲相乃一物を方便を繰て成形乃色形をみる。
されば株柳柿木に目鼻我刻を。美光に紅鳴をかし。美雲あり株
雲我くもぶる。見もとゝ修り信作乃自然には。心佛ひとしくや。さい
てや見は意化乃正方。源信和尚冥土来迎仏を。此時をうつとり
給ふらんと。然後の洞徒に滝をなせり。やゝいとしれしかれど。天

心獨朗乃親様不是をかれてこそやさは唐道著述乃龍風り
かつてなぐむれば。宮雲乃詩材たふるゆゑく。机堂乃文寶たりに
みちくなり。悔しや和尚の二聖に見せたらましかば。鳴石雲鯉
乃枕をなげ。此見えるに彩を乃畫く。風賊比乃掃桃李も。季我
からずしておよびに唯我雲。秀逸の六仙をさずらぬまし。かば
撰集乃紙囊を投ぐ。あれ第相乃蓋我あり。真雅頌乃雪月
霞。時ならずしてく額に出らず物をかくて。雲我待としもあらず
雲。漸々と窟に簾る。帕乃うちより握飯とりあ。宮摩しがれて
良さしおしに。伴豆乃海や澳の小鳴の常儀より生ふ。雲に雲の月あの
くとみおもと。夜の夜乃雲を海原より先ふるめるに。同行人は
かりじ果てく。参差で躺とト鼾ニ予をひとりて交睫としてく。金珠摘。
兜風に接電ひきうれ。しらんとうれるに曙ぎましきや。鐘の色

海より浪路遥にして瀾と見わたさるゝがほどなくおもしろき眺
はるさしむかひきさらなり。混沌乃鞴と呼べく、天覆鉢にはるかに見て
かくあらむと知られぬ。丸天はるかの紫霞をしでかんとす。嗚呼此
風景かの探幽もかくあらむ。雪舟も筆をもて描きがたし。
むかしの人も冨士を今おもへて数多く詠おかれし唱
信に雲のふところに記されし二乃堂の玻璃をさしても、三の名にしあふ
かゝる勝景に接しては心ゆくばかりになりて、下向乃猿社の頂にあり
後見ゆる人々のことく仁形乃冨岳にはるかに見たゆる言
輌書をしてよのこゝろびるにも我が拙き心の天地も成仏するものをと
思ふのみ。下略　寛享三皐月旬余　湖山飛散人　寓直堂　三千風　謹書

○連歌　雲にひろく百よ山白し冨士乃嶽　肥前長崎諏訪神職　青木氏永弘

ふるさとに鏡の浦にうつりぬる冨士のこゝろげや不尽のみゆる月　同

此永弘大徳乃辞世にも、七八年部吉田乃崎にて謁して、求
遠見乃によびて、ぎやうとそのまゝに有りをゆるされ真人にとらさら
冨士山頂に三百通行して、今乃世の冨士講乃祖ありしが弟子と背の
あふぐもの多くあり。ありしまゝに宮にいたる。

○同聖に仁形を立て冨士をもるゝ乃中道を西へ京野蔵尾内若
まで登る。駿河口大宮にはなはだ本面浅間大社より。又是より
驪龍齒牙の巖、三滝に至る。すべて境地いよいよ広し。是れより
雉をうるとも案内者をつけて竈口乃綱梯をこえ、蘇川乃縁ミ峠
廻るとても三百ばかりは甲州身延山の麓は
いまだ富士山景眺乃一軸にも編略。此次に掲ぐ

○日蓮大上人開基甲州身延山久遠寺乃三吾庵の事に
よりていはく。第一殊勝地。日朝三十二乃法嶺なり。仏法繁花と

いひ。仏閣乃奇麗なる事。堂塔社廟。宇宙に容易(たやす)
三十余棟。遠市六十余町。門前町より家二百余ヶ。裏院坂(ウラヰンサカ)を十
町。乃至(ないし)五六町。石塔石碑。数(かず)しれみてござ。遠寺又周(まわり)三里ばかり
七面(シチメン)の神(かみ)ほこら。四軒乃うち。四十町八坂の巓(イタヾキ)に茅屋(ボウヲク)の社(やしろ)家。
水も絶(たえ)遠(とほ)くて富士を始(はじめ)。諸山(シヨサン)を拝(おが)む。眺望(テウボウ)よくて宜(よろ)しく
みてござりやす。やごく宿坊(シユクバウ)より一軸(ヂク)の序(ジョ)をこふ。依(よつ)て
其(その)編暑(ヘンショ)の詩会(シクワイ)をかく。

○南園(ナンエン)のかりね風(かぜ)を引(ひき)延(のべ)る哉(かな)

それ暑(あつ)の避(さけ)るよりはくさみぐさ(草)のうへぬるに古(ふる)歌(うた)多(おほ)く
侍(はべ)るをこゝろみるに。

○ほとゝぎす(時鳥)なくや五月(さつき)の雨(あめ)の上(うへ)

○ほとゝぎす(時鳥)なくや五月(さつき)の雨(あめ)の上(うへ)

○ほとゝぎす(時鳥)なくや五月(さつき)の雨(あめ)の上(うへ)

など。雨(あめ)の記(しるし)屏風(びやうぶ)歌(うた)ども書(かき)侍(はべ)る道(みち)にて。

○同(おなじ)さと(里)柳町(やなぎまち)傳(つたへ)聖氏(ひじり)よりく(来)る。

題(だい)を得(え)てこと(事)ばをもふく(含)めて。

○梅(うめ)の香(か)に毛(け)虫(むし)も稽(とゞ)や下(した)風(かぜ)

ぞにく(憎)き屋(や)也(なり)。

○西日(にしび)の酒(さけ)の茶(ちや)を連歌(れんが)の簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

甲府 宗匠

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

松木氏 安貞

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

森氏 一峰

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

内田氏 吉堅

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

石氏三淑 任

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

祢津 松壱

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

高橋 安信

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

奥野 昌信

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

牧野 宗山

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

加賀美 三益

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

伴ノ 長行

○涼風(すゞかぜ)の堂(だう)を乃(の)ぞきそ(来)ゝ程(ほど)ふ

暑(しよ)を儘(つく)す連歌(れんが)乃(の)簟(てんきやう)なりば居(ゐ)

四季(しき)咲(さく)る東夷(とうい)徊徊(くわいくわい)

乃(の)ぞの切(きれ)なり。

言(こと)ばの扉(とびら)よ。新(あたら)絖(ぬの)

波(なみ)乃(の)句(く)よりおこり

やさ(易)しきを乃(の)ぞ

○新(あたら)絖(ぬの)は夏(なつ)

衣(ころも)のぬるゝ甲斐(かひ)の連

衣(ころも)一(ひと)巻(まき)尚(なほ)餐(さんそん)納(おさめ)の

愛(あい)弟(てい)金(きん)板(ばん)の写(うつし)。

餐(さん)飡(そん)乃(の)句(く)をもくゝ小

序(じよ)をつゞるく書(かき)と侍(はべ)

望せられぬぞひまくかぎ
なかりし。これ発句。序は略
○かゝりけるにおなじく わがこゝろ 翅梅

白拍乃夜芭蕉庵を除てよけ　高橋　安春
名ぞ鹿の宮城二代の宮城萩　金澤　好元
夏衣蚕やまつまはりし難か僧　奥野　好興

○いさや信玄公籠城をかんあとして浅はりてりける乃形ぬさし
見乃ころ。錐地礎花園乃畔。塘乃獨樂がもここは櫓。富士見乃
降殺からぞかりあはせたりてそれまの地しさまざまのに大将の
館はいまぞ靈威乃とぞまれぞや。野飼乃牛馬も石垣乃うちへ
立ならさびしれ哉　○吉峯やふりし富士見への赤庭
○かくて甲府を立さし。むかの暖場のゆ。鵜飼ちる猿丸くかの信玄公
菩提所。乾徳山恵林寺に案内して。前山老和尚に謁し。後れ
乃もてなれとはらし。当寺も古徳のごく境内二千畳四方。殿閣重々二
奥室よこにいるを立る。稗也例乃愚陰筆を嚙むし。長編をや油記。

○乾徳山恵林寺　名れにめて都下花乃りも来りとれうゆけふ
鄙乃坐扶脱せ。ふ為るりを来る七て霧も。猿あかれ候ふてか。乃
面影を跳構り。何乃ほとりやとへ行し。鉢ひろき塩乃紙をちてひ。
菴乃角牧ままとこり牛乃牛舞鞋乃の旨ぞ。禄までもとて
ともうゆうにぞ。さりながらあり。甘利乃縕藐をかざし。家陽乃
冨種を抓莉よせんと思へそれ。かくにたれ。いさや宗猊乃仏毛は
紙をそてんと猿ゆふくふらんとし一乃精合あらず。古ぞ糟飼
齢せさく。乾徳恵林乃四言よりり。八景乃体験を少ちある事をと
乾徳山といろう。大殺の法穆。夢窓の天標に似る扶夜の恵林寺乃
月はのあめる乃雅を尚住乃聞よも無。かく者ぞ。かやどきき。細
祖再世乃夢窓國師開き給ふより。中古三徳乃名玄武田信
玄猿門。自ら乃の得乗をうほし。大圓鏡智乃稚付ふむらひ。読

匠を咫尺として。青蛇乃利刀をおもす。蚨蠖乃方寸とあて刻まちめなふ。中央宮の鷹牙。天上天下乃東眼は形遠方もしむるちらちを。左乃玉宇は岡山乃金狩。霜眉仰て鄙らうだ事也。かけ後地紀氣といはんに。異鷲自鷺乃法の巣立も。宮をや羽をやすめぬる事。洞庭乃七十峯額にかさなり。那智三百丈乃飛雪も枕にふりけり。欄おに陰潔なる麟抹を朝乃霧を賞。登和に屈鞿なる竜杖を。夕へ乃泉に鼾をゆづる。いかなれ紀宇賞なの深邊道者もまぶしとさげど。座援雲を居も瓢器をわきれ。人参深雲を紫繒を投げ画し。かくて曲住荊山大幽中眞として。金閣珠樓あらたに孫さ。それ音聞き乃座にひぐさ。ゆるしその褶れをぐてしく。和下咲を見るに見性の虚心は紫襟乃霧ひらりとまし。大悟乃寛魂は白拂の

風濕にふくぞれ和は慕に宿海お砌に蕩へ。その派をしれば雲前は清閑にむれたり。画枕ちりぞひまりて聲鈸を目にかけわなぐさくあまへしに。実法乃めぐに。四七一連にぬさ柳とまづ。三十にむらひてよとすぐ詠び賦たまふ。例乃大石とあきて。雲れ乃一句は挽撕しく。鉄丸乃月は吾むくやすれど。咽にちびらるて。唱

○牛を洗つ涎り称ふ月獨　三千風

○貽騒人友翰子

遠過林間雲水客　親聽聲咳出庸流
誹歌一日三千首　行履多年六十州　惠山水際汲清書
身生冷看似虚舟　兩曜任他忙互流　到處春風秋月裏
雲遊笑問是何州　惠林下片雲艸
雨笠霜包歳月悠　遥尋惠阜沿清流　有人如問雲遊意
笑道扶桑元一州　惠林下玄加艸具

○奴をしてこれ
美志これぐし。かくて
花さ花乃こてらに一
歌ひたるし。記畧

○身世れ生れ我ちく行の生身冥（イキミ　冬）　惠林下　道休
夢乃海境みち風も引ならひ　甲州花咲　善福寺　玄祐

○大月猿橋我国上の京開柳古聖小原小仏鯨我城こく我義
八王子　馬淵　是好

○七月十三日。国聖。府中石原我国こく。又たち国る我義聖乃。富
山薬柳に茶にくり。○かくて我義聖乃ちらんよさ富士乃
やまも。動くばかり乃ち車。金玉乃市中に国縁しく。空にと国
が。生。これより。花族英才乃智人とくも。空れ家蓮宮なく。被
藁枕巻乃乞凶飛人も。はからざれに上京閣に暴る。あらう素生
道乃虚渇腹に。夏行雑物乃罪荷我積んといきらん。いさやさ
雲稿一笠。死生一貫乃紙衣我帆にあまらく。秋秋風乃一葉
崩橋より雲おし。本代いらぬの見つけ高。花なる此漆。風をこれ津

にしろそせまたれ行徳白井大森。木風乃なるに小ゆられ右を下
総香取乃神。雲陸乃湖水りなぐれとし。志田の浮鳴浮洲云。
猿のとりまつ鹿鳴なる。大船ゑのぎあるわかる。

○鹿島　穂鳥り築く鹿島乃や。甕速日神雲を。三笠の山
に和生をく。空に性還浮雲の。こやびをかけをこ鳥ち浦。なるも
うごかぬ要石。これや神道中極の。泰国柱なる姿めや。柳園幣
舎かうくしく。志我儿女笛れれこ。すぐしめれ夢に雲鶴も落
穂我日をれとく松風に翻る。鍋鑵も波心我離こく陸地に躍る。此
光艶見るしかしくて。鞋ぬぐらし法楽乃一紙奉納を。記畧

○金風動せども。色不変鹿島松。　此日風ぐて大船ゑり
雲おし。柏崎島田民正房丈りしたく。これ麗お鹿浦ハ法を見
京眺。湖上ノ記長編しこく。屏風にかいたまし。記畧

「ちへとさる雲乃みちぞとおもひし霞乃跡も秋の夕暮。
○藤沢飯田宿に称しき。　○秋の日や入る雷夜桜川
めぐれむ筑波のみすゞ　○草鞋乃あとや蹉まくる水無瀬川
○筑波山麓　きやくしき山乃麓より筑波乃里。右首字知
足院中禅寺なり。山ハ寺の頂より一里半の苔路
滑らかにしく雲霧のぼり。吃く弥山。信しる年の後に
おもろく二上男女男体女体権現鎮しまする。推案御鏑とく。真新
尽寡にくらし。信を寄る山を神仏秘蔵乃宮ありて住る
きそげ。太夫乃作り新に述し。和哥のうた村々をぶちぞおもふ
歴々とみるか富士はるかにさくら也。広くたる湖瀬赤飯を走り
月日我等をふ常陸常らくかとろぬ神宿世なるとて古代
の神跡をとふしおもふに「神代より月日は気をとふえて死結び

とあひ常陸ゆへ「筑波山暮より落る水でゞ淵となるのちか
らも乃松風の音。○鴻阿笹乃陰路をとゞめくく三里北に道
とかゝる。大猪竹野往来なる水戸の繁栄をおもひつゞけぞ。
作家鉄武乃蛇を出る恵る民家の賑しきを見れば文字机上乃
徳声巷の耳に指し如きり。川をこえ赤柳村乃桂ある能登壊納
に閑静しく記ともちるゝ。久自寺中。英岸上人会めきて延見再
会に昔をたつるころ忘れても　○寶宿や一白三千乃月を証　常陸久昌寺中英岸
○ゆかれし太田の里なり。古佐竹乃居城。余は八幡宮の別当ニテ　○足とゞめよ金風高臺蓮花山　太田蓮華寺　日遥
○菊月九日。赤沢孫成寺日遥。名を一宿し死
乃草の慈をう知りてこゝろ小一袖法くうすんをみし侍る。上田荒町九
運ぶ色をやみちのくいる。浜我大かの一岸の草ね道せり
くろく。岩穴をぬ出て里人とむすびあかしの猶生生なり

われる俳諧乃連ゆづり 開闔(かいこう)して 辞路(じろ)ていまの 世に
よく指(さし)やう撥(はつ)の名人。おのれ初(はじめ)て 聞(きく)とおなじ
らようのぎ乃いきほひ。松(まつ)みどり 家彼(かのこ)をちらずかつら 鬘路(かづら)
こうたうまで。古(ふる)くもうまく。○秀句(しうく)とい 屋小南(やこなん)
やくこと 多(おほ)の 帥(そち)湯(ゆ)より 雛棲(ひなすみ)やらくまで。城下
乃(の)人(ひと)は 郷(さと)乃(の)神(かみ)祇(ぎ)とも 仰(あふ)ぐ 郷(さと)小屋(こや)
つゞみ 太鼓(たいこ)乃(の)拍子(ひやうし)。又(また)月(つき)中(なか)乃(の)神(かみ)祇(ぎ)とも 仰(あふ)ぐ 郷(さと)小屋(こや)
宮(みや)小屋(こや)。三味線(しやみせん)。 追込(おひこみ)。 笛(ふえ)風(ふう)小屋(こや)。 踊(おどり)子(こ)。 遠(とほ)
くより 見(み)ゆる。○秀句(しうく)とい 屋小南(やこなん)とも 号(がう)小南(こなん)。

あそぶ。信(しん)ようつくしき 鳥(とり)つきて 町(まち)もにぎ
やかなる 城下(じやうか)乃(の)ほとり。○かく 俗(ぞく)
町(まち)のうち 上富(かみとみ)乃(の)指(さし)口(くち)風(ふう)小屋(こや)
多(おほ)く 集(あつま)る。 茂吉(もきち)
辨(べん)西(さい)牧(まき)乃(の)町(まち)をうぐいす。○三月(さんぐわつ)
にく。同士(どうし)をのく 人(ひと)の 誉(ほま)れ。
乃(の)練(ねり)道(みち)。 ○秀句(しうく)とい 屋小南(やこなん)
○ええぬえ 目(め)を
おさへられ 朧(おぼろ)乃(の)油(あぶら)の 売(うり)も。
御(ご)霊(りやう)
まつる 屋(や)の 前(まへ)小向(こむかひ)いる 三栄(さんえい)

町(まち)もうち 上富(かみとみ)乃(の)指(さし)口(くち)風(ふう)小屋(こや)
多(おほ)く 集(あつま)る。 茂吉(もきち)
辨(べん)西(さい)牧(まき)乃(の)町(まち)をうぐいす。○三月(さんぐわつ)
にく。同士(どうし)をのく 人(ひと)の 誉(ほま)れ。
乃(の)練(ねり)道(みち)。 ○秀句(しうく)とい 屋小南(やこなん)
○ええぬえ 目(め)を
おさへられ 朧(おぼろ)乃(の)油(あぶら)の 売(うり)も。
御(ご)霊(りやう)
まつる 屋(や)の 前(まへ)小向(こむかひ)いる 三栄(さんえい)

村大窪氏は若し家乃不作繁昌乃神を一袖にて八業吟をはくる

○富家行　三才穿事ぬくに茅地若なのあり。其役其行。其

徳。其理。其事減一にしてくるまり。只身をやすくする事は屋を

潤す。治生産業乃家風あまぐ也。とはみちのく信濃文山の藤

伊達郡川俣大久保氏正次稲を耕す。積吾乃福種なりて。

枝葉群て藩宇渥て。一朝一夕乃世話乃ゆつき。珠算を除くに

およびちびぬへし。第一むひとなりまれ。子町乃贄田園なめぐ

ま。富人乃稼を耕毛秕さくなく実おほし。さればし獲安穫重

なるをのまくが鎌筍柯にかけて。いづさ入さ乃なりさまは。福居

乃むかゆるがごとし。他国がよひ乃多代がしらも。如衣美ぐ花

穂に鞭し。商舶に運送す。廊の左には。宝蔵文庫を並へ。右乃

和面に酒蔵を建國乃うちへ清河をせなしいれ。其餘は糠車

戸戸連筒をとりて。田園をやるらせし。旨酒乃角槽には菊の露澄

々也。榼口ごれくしゆひぐくもやらほし。毎屋の塢底には濕氣を

凝す。麹室。又籬隔にあらうに。駉々廐に見ゆさして。求今の声

家風にはらふ。酒飯甑。冨者ハ艶しと立のぞるをやぐく箕掃女厨

女手にく貰をうづさはるくもいきし。事ぬり。家事ハ横座し

て芋筍にもらふ。飯乃菓吾をなぐらいらなく下知するもかし

こし。あまたには榨。攪車。碓磑。小奇はじまふ息くも。燕と中の百

ろは妓妒をさて。蠶箱三ツ五ツくゆらうし。白糸乃氷蠶をくり

おを。はこつき窈窕。摻くしてくなよ行乃箕こ行くとはく。

いとあいぐれなり。こなこ乃寄付には織女のゆより。繊婦乃らう

だまに。学るを乃掃掃をとりぐせ。名古乃さぐわぐさ。かぞさしの箴

毛をふく織複。弓張乃簇掃蹇乃虹。箱框乃鼠。絵乃滝。きり

まうちやうとさるもあれば。こゝに巖下百済乃くまなりてゆくらじ。
世にさこそふる福禄頭を廿里乃名所でさめれば。急に京市女郎
翁乃質禅を懐きさ。眉乃猶父もし。北に冥盈乃月揚字をとれ。
はるそ帘に遊せし。郷中もに腕に月彩酌。下略。此外八業八句略
同慕月廿二日小川氏を生。安達原。黒塚。檀里。こゝ年松に笹舎
しらく。会津にかゝりし。柳津果出山円蔵寺虚空蔵に詣
旅に寓山を法相唯識乃徳一大師開基乃地。中なるを空海作。
果語佛。猶上河岸村の風景。其外の眺望なり。則下に発句を付
三首一軸せし。略す。旅宿乃小鶴平に一紙をとく。〇柳津や
搬乃町名松小路。　〇松茸の笠あり百行るも明まで　奥州柳津 小川氏
とらへで見て挨拶す。　風もるに柳津一しまふたつさりたらし　同所内田 幽雪
〇それより会津坂下にいたる松よろしく出でまいぞみちのく乃都。塔地僊と

して目給とぞ知ゆぐし。風色相性乃福田をハ。五穀厚ゆ。陰陽和合
乃政なるらしき。竈乃烟仁嵐になるひく。さらずむ盤台山乃鶴ハ雛を
千歳の松にゆだねり。猪苗代乃池ハ亀も甲に三徳の壽世を負
あり。磐梯山ぶ鏡乃るに近もや。生涯の会津嶺も。若松侍いし見ると光しへ。
喜辺乃最上河を羅童子　おもひ辨おやかりぬるに会津山　宿主若松公新田氏 慶重
の鳴を空し。いつとなくめでたき　山の端に笠今一度咲秋風にも　同 俊門
国風も乃心も温和なる　寓言義芦の眺萩とられん　一松軒 西雪
めでたく。十日何事なり暇乞し。　宝もくむ一葉も除に笹　高野 孝意
〇田中氏医杭長番老にて。世仙養をまくはりて君しに候またるて一詩
一句を給ひし　〇金風蕭颯守秋夜　千里特来感道情　談笑適超塵世
外　静聴月下草虫鳴　又句〇十能年ぶる難の雲晴し　会津田中氏 長菴
〇くつ瞞と又それより米沢へとおぼし。越後〇阿賀塩村にて名小川の岸

水塩漏ぬ大師のかね塩とるん。養ゐ乃事也。不捨も山重にあてとるん。
栢柿をも栢原に一宿して。金山小屋をも。米沢に入りたまふ米の事
桐ゐなれば賑しく。氣質 ○米沢や金の穂捨ふ霧の中
飾て黎。翹て雅友あれり。 吉原切稀霧の手ひど 米沢大町宿 林氏

○栢柿をもつて東へ飛ぶ人 猪野氏 玄之

○米澤文殊 高山栢山不珠院は曲所天照大神に本地の眼を慕。
遠の余ゐ小御し。下津光相に飛来の新羽浅隊。樹水を待せかいせしを。
他縁太素心乃種子法相の東梁塩上聖祖神宮をとうす。高山栢山の
眞をあけ。不種香水の柱をふこ。百法樹下の水に成る。引導の光明に
寄給へば。般若の花乃窟中には法佛光毎乃乳不祈。赫ことと張れたまふ
信に本朝一二乃諸佛者なり 下略 ○利根水の月も仏の母乳吾でん。
袋の尾からまて。光陽に合ちや羽刀山形に志る。 行脚文集巻六 終